

SDS

SAMULI NAMANKA INTERVIEW

* Text by Chiharu Watabe
by Kentaro Oshio

サムリ・ナーマンカ インタヴュー

インタヴュー文 渡部千春 写真 押尾健太郎

「技術が決まってしまうえば、フォルムを作るのは簡単です」

サムリ・ナーマンカ。インテリアデザイナー・フィンランド人。デザインジャンルにいる読者でもナーマンカの名前を知る人は少ないだろう。前置きとして、10月初旬に行われた「ヘルシンキデザインウィーク」から話を始めたい。

ヘルシンキデザインウィークは、東京でいえばデザインウィーク、デザインウィークのようなデザインイベントで、今年8回目を迎える。現在世界の各国、各都市でデザインイベントが盛んだが、デザイン大国で知られるフィンランド、ヘルシンキのそれは意外に知らない。

むしろ、北欧デザイン人気はまだに健在

だ。フィンランドではアルトゥ・マリメッコ、イッタラなどのブランド、あるいはアルヴァ・アアルトに始まり、イルマリ・タピオヴァラ、タピオ・ウイルクカ、エエロ・アアルニオ、カイ・フラックなど、日本に限らず、アジア欧米で強い人気を誇っているが、ペーシは常にモダンニスム、特に50年代60年代となる。

コンテンポラリーデザインの中心では、ハッリ・コスキネンというスターが誕生し、プロクランプを持っていて鮮烈にデビューしたのは98年。彼もすでに10年選手となつている。コスキネン以後、フィンランドのデザインは力を失ったのか、と

えは決してそうではない。

ヘルシンキデザインウィークの目玉イベントしたのは、現代フィンランドデザイナー100のアイテムを揃えた展覧会「SHOW 100」。イッタラ、マリメッコと並んで、若手デザイナー VMLI Limのまだ発売されていない未製照明も、60年代風でフェティッシュ心を明かせる Milla Parikka の靴も、アウトドアウェアエロの携帯ジャケットも、はたまたソフトバンクや歯磨き精のパッケージ、あるいは音楽も、生活全般に及ぶデザインが並列に並び、それらは、世界のトレンドに流されない強い個性を見せる。

このメイン会場には3万人が来場した。東奇のデザインイベントにもひけを取らな

い人数だが、ヘルシンキの人口が58万人、近郊都市を含めても100万人という小さな街で、この人数は驚きだろう。加えて、家族連れや若者夫婦など入場者の層も幅広い。ヘルシンキという街ではデザインが広く、深く根付いている。

国内でこれだけデザインが盛り上がりながらも、国外的に知られているのはなぜなのか。それを説明するのに、ナーマンカがデザインはいい例となる。実際、現代フィンランドを代表するデザイナーとして、ヘルシンキデザイナーウィークの場でも強くお褒めされたのが、サムリ・ナーマンカなのである。

「リンクリトナーマンカ。そう友達は私

のことを呼んでいます」

笑わせるつもりなのか事実を伝えているだけののか判断のつきがたい表情で、ゆっくりと話す。

アラフィック、コンクリート。これは私の中でも最大の開発です。4年掛けた。コンクリートをキャストするとき、下にグラフックを加工したフィルムを置いておく。コンクリートが固まった後はがし、洗い流すを繰り返した。面と平坦な面が残り、「コンクリートにパターンを残すことができるわけですが、フィンランドではオフィスや集合住宅のファサードとしてコンクリートを使いますが、大体その割合はに使用されています」

「ナーマンカさんのことを家具デザイナーナードと思つていたのですが、これは誤解なのでしようか。」

「私はインテリアデザイナーであり、ランドスケープデザイナーだと思つています。グラフィック・コンクリートはランドスケープに応用される、建築の道具として作つたものです。椅子も作りませんが、それがインテリアデザイナーの中の道具であり、道具を使って空間が構成されるを考えるからなのです」

「家具が多く受賞されているようですが、道具として作つた物自体が高く評価さ

れているのは不思議な感じがします。

「クラッシュ・チェアやユニ・チェアは高い評価を受けました。私は技術畑の人間です。新しい技術に挑戦し、結果椅子が作られた、と言ったほうがよいかもしれません。全くねじを使わずに金属部分と木材の座面が接合した椅子を作りたい。ブライトウッドだけでクラッシュができて椅子を作りたい。こうしてクラッシュ・チェア、ユニ・チェアが生まれたのです。」

ある日、新聞を読んでいたら、フィンランドの会社がロビーエドで重事に使われたアルミニウムをリサイクルして、と書いてありました。それが再度重事に使われることは好ましくない、ならばそれで道具を作らうと思ひ、サイドエアができました。パーツはひとつだけで。軽量で強度のある品質のアルミニウムです。強度は十分でスタッキングにも向きます。

ハンギングチェアのイエッラは、ブライトウッドで球を作れないかという疑問からスタートしました。現在は100%自然素材の車のシートを開発しています。ほげプラスチックに近いものができてきました」

「常に技術への挑戦からのスタートなので、すね。

「そうです。こんなものができないかと思ひ、作り方を考える。テストをする。技術が決まってしまうは、フォルムを作るのは簡単です」

Form follows function 形は機能に従う。モダニスムの時代に念仏のごとく唱えられた言葉を、素直に体现するナーマンカは、自他とも認める。アアルトの正統な継承者である。

なぜ今のフィンランドデザインが対外的に推し進められているのか、に話を戻そう。

モダニスムの時代から今に至つても、フィンランドデザインは人に見せるためのものではない。振り返つて、アアルトも世界を驚かすためのデザインを作ろうとしたのではなかった。「建築に関してはイン

パクト優先ではないかと思うものはあれ

ブライトウッドの開発も、その結果としての家具も、あくまで建築の一部として必要なものを調達しようとしたからではないか。ステータスと比較で言えば、隣国スウェーデンは世界のトレンドに敏感であり、見目麗しく、写真に撮つても華があるが、概してフィンランドのデザインはそこに隣接しているとは思えないほど、トレンドから離れ、独自の路線を行く、というよう

なことを別のフィンランド人デザイナーに言つてみたら「そんなの、気が付いてなかった。ちよつと「ヨック」などと言ふ。強い個性を持っていることに彼ら自身、無自覚なのだろう。他者の目にと映るかよりも、まずは自分が満足できる生活を旨とする。幸せな世界に彼らはいる。」

とはいえ、コンパス会社が出した腕時計型が突如カッコイイものとなる。日用の食器がかわいいと評価される。所詮いつかは世界の目に見つかつてしまうのであれば、それではあえてうさ世界に飛び込んでいくことはない。

決して声高ではないナーマンカの作品群が東京に送られてきたのは、この騒がしい世界の中で静寂を保つていられるから、そんなメッセージを訴えようとしたからではないだろうか。



サムリ・ナーマンカ

1969年フィンランド、キウミンキ生まれ。建築設計事務所「サムリ・ナーマンカ」を設立。インテリア、家具を手がける。2007年、フィンランドの建築家協会「SAFA」の会長に就任。2010年、フィンランドの建築家協会「SAFA」の会長に就任。2010年、フィンランドの建築家協会「SAFA」の会長に就任。



アルヴァ・アアルト美術館からの巡回となるサムリ・ナーマンカの「アート・アンド・インダストリー」展は新宿パークタワーのギャラリー1にて10月30日~11月3日まで開催された。ネジを使わずに座面と脚を接合したクラッシュ・チェアやコンクリートに縦溝を深くグラフィック・コンクリートといった代表作から、球状が一目を惹いた新作のイエッラ・チェアなど、技術に裏付けられた斬新なデザインからはフィンランドらしさを強く感じる。www.samulinamanka.com